The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ニーチェ『悲劇の誕生』におけるアポロンについて
Author(s)	谷山, 弘太
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2014, 48, p. 33-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56597
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ニーチェ『悲劇の誕生』におけるアポロンについて

谷 山　弘 太

キーワード：アポロン／仮象／世界観／幻想／錯覚

序

本稿はニーチェの『悲劇の誕生』（以下『悲劇』）[1] 1～4節を扱う。『悲劇』本来の議論が始まるのは無論これ以降であり、従って本稿の射程はいわばその前置きの部分に過ぎない。一方で、アポロンそれ自体がこれほど集中的に論じられる箇所は他になく、アポロンを理解するためにここは欠かせない部分である。通例駆け足で通り抜けられるこの箇所を詳論することで、アポロンとは如何なる神かを明示することが本稿の目的である。その際、本稿の考察は、アポロンの仮象性の意識を軸に展開される。

アポロンの相貌は多様である。それらのうちその核心をなすのは、『悲劇』本来の主題たる生の是認の神としてのアポロンである。「アポロンという名の下に、我々はあらゆる瞬間に生存一般を生きるに値するものにし、次の瞬間の体験へと押しやる美しい仮象の無数の幻想すべてを総括する」（GT25）。本稿の主張はこうだ。生の是認の神アポロンは、世界観の神である。生を可能にする世界観を紡ぐことこそアポロンの神髄である。そしてアポロンは世界観の神として同時に幻想あるいは錯覚の神でもある。

夢の神

『悲劇』第1節で、アポロンは夢の神として登場する。我々はここでさっそくアポロンの捉え難さに突き当たる。夢についてのニーチェの記述には、すんなりとは共感し難い部分があるのだ。

> （夢の中で）我々は直接的な理解において形姿を享受するし、全ての形式が我々に語りかけ、どうでもいいもの、不必要なものは何一つ存在しない。この夢の現実の最高の生に際しても、我々はやはりそれが仮象であるという、一貫して流れる微かな知覚を持っている。（GT1／（　）は筆者）

これは、夢の自覚を持ちつつ夢を見る明晰夢の経験である。ここにすでに仮象の仮象性の意識が現われている。それは如何なる意識なのか？　いずれにせよ、ニーチェの夢の奇妙さはこの直後から始まる。夢見る者が、

> 十全な理解をもってその身に経験するものは、ひたすら快適で楽しい形象だけなどというわけではない。厳粛なもの・陰気なもの・悲しいもの・暗黒なもの・突然の障害・偶然のたわむれ・不安な期待など、要するに、地獄篇をも含む生の『神曲』全体が彼の傍らを通り過ぎるのだが、それも単に影絵芝居のようにではなく――なぜなら彼はそれらの場面の中で身をもって生き、身をもって悩むからである――、しかもやはり、これは仮象だという微かな知覚なしにではない。そしておそらく多くの人々が私と同様に、夢の中の様々な危険と驚愕に出会っている場合に、ときおり「これは夢なんだ！　私はこの夢を見続けよう！」と叫んで自分を元気づけようとして、それに成功した経験を思い出すであろう。（GT1）

ニーチェ曰く、我々は、夢の仮象性の意識ゆえに、あるいはそれにもかかわらず、悪夢を見続けることがある。この意識と悪夢の継続との関係が順接か逆接かがすでに問題である。なるほど、悪夢が仮象として、すなわち非現実として意識されれば、その恐ろしさが解消され、夢の継続を意志しうるかもしれない。しかしその時すでに夢を見続ける必然性もまた失われているだろう。その必要性がないにもかかわらず、夢の継続を意志するなど極めて奇妙であると言わざるをえない。[2)] 仮象性の意識と悪夢の継続とはむしろ逆接で表現されるべきだろう。つまり、我々は、それが現実のものではないと知りつつも、それでもなお悪夢を見続けようとするのだ、と。しかし何故か？

ニーチェの答えはこうだ。「この事実は、我々の内奥の本質、我々全ての人間の共通の基盤が、深い快感と楽しい必然性をもって夢を自ら経験するのだということを、明らかに立証する」（GT1）。夢の継続を意志させるのは、夢あるいは仮象観照の快感である。しかし、これに直ちに共感することができるだろうか？

ところで、「我々の内奥の本質」、「我々全ての人間の共通の基盤」という文言は、明らかに「根源一者」の形而上学の布石である。事実、第4節では、この快感は仮象に対する「根源一者」の快感を引き継いだものとされる。しかし我々は注意しなくてはならない。この快感の想定を「根源一者」の形而上学からいわば仕方なく納得するとなると、ニーチェの意図を転倒させることになりかねないのだ。夢の快感は事実であり、「根源一者」の「形而上学的想定」（GT4）はこの快感の存在理由として導入されている。この快感を共有することで初めて「根源一者」の想定に説得力が付与されるのであって、その逆ではないのである。

一方ニーチェは、夢の世界は「造形芸術の前提であり」、「文芸の重要な一半でもある」（GT1）と言う。夢が「個々の人間と現実的なものとのあいだの戯れである」（DW1）のに対し、造形「芸術は夢を相手とする戯れである」（DW1）。彫刻家は彫像の原イメージをまず夢の形象として見る。彼が

「この形象を大理石に移し入れるとき、彼は夢と戯れている」（DW1）。「彫刻家は彫った大理石によって我々を、自分が夢のように見た生きた神に導く」（DW2）。「こうして本来は目的として眼前に浮かんでいた形姿が彫刻家にも傍観者にも明白になり、前者は彫像という中間形姿によって後者にあとで見る機会を与えることになるのである」（DW2）。それでは、彫像の観照者はそこに何を見るのか？　無論観照者は現実的な彫像を見ている。しかし、彼が真に見ているのは、むしろそれを通して浮かび上がる夢の形姿である。ある意味で観照者はもはや現実の彫像を見ない。彼はそれを介して夢の形姿、仮象を見ているのだ。これは叙事詩においてより明確になる。「叙事詩人は同じ生きた形姿を見て、それを他人にも直観できるように」（DW2）言葉を介して提示する。我々が実際に見るのは言葉であるが、我々はそれを介してそこに吹き込まれた夢の形象を見る。「我々が形姿や群や形象を明らかに眼前に見るようになり、叙事詩人がみずから最初にそれらの表象を産み出したときの夢の状態を我々に伝えるならば、彼の目的は達成されたのである」（DW2）。

造形芸術のこの世界こそがあの夢の世界に他ならない。それは、「観照にすっかり沈潜しているアポロン的な眼の世界」（12［1］）である。夢の観照者は、純粋な眼、あるいは「巨視的に眺める観照そのもの」（GT13）として、観照の快感に浸る。それでは、仮象性の意識は何を意味するのか？ニーチェは言う。「そもそも観照に対するこの内面的な快感をもって夢見ることのできるためには白日とその恐るべきしぶとさとをすっかり忘れていなくてはならない」（GT4）。「白日とその恐るべきしぶとさ」とは、現実的なもの一般、すなわち、現実としての彫像・文字、あるいは個人的存在としての観照者自身であろう。それらが完全に忘却されて初めて、純粋な眼の世界は始まる。その時にこそ、今眼にしているものが仮象であるということが意識されていなくてはならないのだ。事実、我々が文学作品をそれこそ夢中になって読む時も、その仮象性は常に意識されているだろう。我々が観照せんと欲するのはまさにそうした仮象としての仮象である。

先に我々は仮象性の意識と悪夢の継続を順接ではなく逆接で結ぶことを提唱した。しかし、今や再び両者が逆転する。悪夢の継続を意志させるのはやはり仮象性の意識なのだ。とはいえ、この意識はもはや観照者の身の安全性の自覚を意味しない。ニーチェが仮象性の意識を強調するとき、その力点は、安全性といういわば付加価値にあるのではなく、むしろこの意識そのものにある。[3)] というのも、この意識こそが仮象観照の快感の前提であるからだ。その時我々は自身の身を危険に晒してでも仮象の快感に浸ろうとするのだ。「叙事詩的＝アポロン的なるものの威力は並はずれて強いので、極度に恐るべき事物さえ、あの仮象における快感と、仮象による救済に付き添わせて、我々の眼前に浮かび上がらせる魔力を持つ」（GT12）。

ところで、観照の快とは果たして誰の快なのだろうか？　夢＝仮象の観照者は、すでに一対の眼となっており、その限り彼は個体としての存在を失っている。従って、その時感じられる快は正確には彼のものであるとは言えないはずである。それ故にニーチェは、その帰属先を「我々の内奥の本質」、「我々人間全ての基盤」たる「根源一者」に求めるのである。

> 私は、自然の中にあの極度に強力な芸術衝動を認め、この衝動の中に仮象への、仮象による救済への熱烈な憧憬を認めることが多ければ多いほど、ますます強く、真実に存在するもの、根源一者が永遠に苦悩し矛盾に満ちたものとして、同時に絶えざる救済のために魅惑的なヴィジョン、快感に満ちた仮象を必要とするのだ、という形而上学的想定を立てざるをえないと感ずるのである。（GT4）

今や我々は、夢の仮象性の意識を理解すると同時に、そこからニーチェの意図に沿って「根源一者」を導入することに成功した。ところで筆者はここまでのところ、美という観点を導入することを意図的に避けてきた。アポロン的な仮象は常に美しく、観照の快も実際には美しき仮象のそれである。一般にはここからアポロン的な生の是認が導き出される。すなわち、美の快感

が生存の恐怖に打ち勝つのだ、と。しかし、美とは何か？　夢の経験がすでに、この問題を慎重に解釈する必要性を示唆している。というのも、夢に現れるのは、「ひたすら快適で楽しい形象だけなどというわけではなく」、「地獄篇をも含む生の『神曲』全体」もまた夢の内容なのだから。美の快感が生存の恐怖に打ち勝つと言うことがある意味では正しいにしても、問われるべきはその内実である。こうして我々の考察は、オリュンポス時代へと移行することになる。

次節への橋渡しとして、もう一つだけ指摘しておく。筆者は、観照に沈潜する観照者はすでにその個体性は失っていると述べた。しかし、ニーチェの夢の記述にはそれと折り合いの悪い箇所がある。ニーチェは言う。夢見る者は、「夢に現われる姿から生の解釈を行い、夢に現われる事象によって生に対処する訓練をする」（GT1）。ここでの「生」は、夢の生ではなく、現実の生だと思って間違いあるまい。観照者が「生の解釈を行」うのは、個体性を回復した覚醒後であろう。ここで語られているのは、観照時ではなく、観照後の経験である。つまり、観照の事後効果が語られているのだ。

オリュンポスの神々と「シレノスの智慧」

ニーチェはオリュンポスの世界の成立背景を問う。「あれほどまでに光り輝くオリュンポスの神々の群れを生み出すに至った、途方もない欲求は如何なるものだったのか？」（GT3）「ディオニュソスの従者」（GT3）たる「シレノスの智慧」――「「最善のことは存在しないこと、次善のことは死ぬこと」という事実」（DW2）――がここに暗い影を落としている。「ギリシア人は生存の脅威と残虐を知っており、感じていた」（GT3）。「これをギリシア人はオリュンポスの神々という芸術的中間世界によって再三再四新たに超克し、少なくとも隠蔽し、視界から遠ざけた」（GT3）。しかしディオニュソスの到来とともに神々の黄昏が始まる。今やその「芸術的仮象たる本性」（DW2）が明らかになり、「シレノスの智慧」が再び露見する。

二柱の神のこの交替劇はさしあたり次のように理解されよう。アポロンが美しい仮象によってディオニュソス的苦悩を隠蔽し、ディオニュソスがアポロンの仮象性を暴露する、と。アポロン的美によるディオニュソス的苦悩の隠蔽、ディオニュソスによるアポロン的仮象の仮象性の暴露。一見明快なこの理解には実は致命的な欠陥がある。これではまるで、ディオニュソスが到来するまで仮象の仮象性が意識されなかったかのようなのだ。仮象性のあの意識はどうなってしまったのか？　アポロンを理解する鍵はここにある。しかしそもそも、オリュンポスの世界の美しさとは何か？「シレノスの智慧」とは何か？

両者の関係は、「責め苦に会っている殉教者の恍惚たるヴィジョンが彼の苦痛に対して持つ関係と同じだ」（GT3）と言われる。苦しむ殉教者が無苦痛のユートピア的幻想によってその苦痛から逃れるように、ギリシア人はオリュンポスの神々によって「シレノスの智慧」を隠蔽したのだ、と。しかし、ニーチェ自身によるこの類比はある重大な誤解を招きかねない。すなわち、オリュンポスの世界は苦悩一般が存在しない世界ではないのだ。そこでは、「一切の現存するものは善悪いずれにしても神化されている」（GT3）。人間の女をたぶらかす好色なゼウス、激しい嫉妬に燃えるヘラ、その残酷な復讐。神々は、善悪・快苦をともに抱き込みつつ、生を謳歌する。「ここで我々に語りかけるのはひたすら豊満な、のみならず勝ち誇った生存である」（GT3）。そうしたものとして、神々は「シレノスの智慧」に対抗する。「シレノスの智慧」とは、苦悩一般のことではないのだ。

「シレノスの智慧」の記述は、『悲劇』の草稿『ディオニュソス的世界観』（以下『世界観』）と『悲劇的思想の誕生』（以下『思想』）にも見られる。最初の草稿である『世界観』においてはその記述は極めて短い。それに対して次の『思想』に至ると、一文を除いて『悲劇』とほぼ一致することになる。以下、『思想』からの引用であるが、太字の部分が問題の一文である。

惨めなかげろうの類よ、労苦と困窮の子らよ、聞いてもお前のためには

> 役にも立たぬことを、なぜおれに無理に言わせるのだ。**なぜなら、自分の惨めさを知らぬうちにこそ、おまえたちの生はいちばん苦しみなく過ぎ去っていくのだ。ひとたび人間となった者は、そもそも最もすばらしい者にはなりえないので、最善のものの本質にはまったく関与しえないのだ。**だから、男女を問わずおまえたちすべての者にとって最善のことは生まれなかったことなのだ。しかし次善のことは――生まれてしまった以上は、できるだけ早く死ぬことだ。（GG, S.588）

「シレノスの智慧」が象徴するのは、「自分の惨めさ」である。それはギリシア人に固有の苦悩であった。「あらゆる衝動の強さによってギリシア人の生はより苦悩にみちたものになった」（7[53]）。彼らは激しく生を志向し、それだけ一層激しい苦悩に苛まれざるをえなかった。そうした生が行き着く先が深い絶望であったとしても不思議ではあるまい。その生の可能な帰結としての「生存のむなしさ」（DW3）、それこそ「シレノスの智慧」として彫琢されたものである。ギリシア人は苦悩一般の存在を否定しない。オリュンポスの神々を「案出したのは不安に脅えた心情ではなかった。ある天才的な想像力が、生にそむくために、あの神々の姿を空中に描き出したというわけではない」（DW2）。彼らが戦ったのは、苦悩というよりもむしろ「苦悩の智慧」（GT3）である。そのためにこそ、苦悩を含みつつもなお美しい神々の世界が必要であったのだ。「あれほどまでに敏感で、激しい願望に燃え、類なく悩む能力を具えた、あのギリシア民族は、もしも生存が一層高い栄光の流れに包まれている有様を神々の姿の中に示されなかったとしたら、この生存にどうして耐えることができたであろう」（GT3）。

それではオリュンポスの神々の美しさとは何か？　ニーチェは、「美 Schönheit」を「浄化 Verklärung」と結びつけて論じる。verklären は、「（顔・容姿などを）輝かしいものにする、神々しくする、美化する、理想化する」という動詞であるが、その第一義は「変容させる」である（『独和大辞典』（小学館））。「主イエスの変容 Verklärung des Herrn」。弟子たちが見た光輝

くイエスこそがverklärtされた姿である。[4] オリュンポスの神々もまた何かがverklärtされた姿であった。それは何か？　ギリシア人自身の生に他ならない。「こうして神々は人間の生を自ら生きることによって、この生を是認した」（GT3）。「このような神々の明るい陽光の下で、生存はそれ自体として追い求めるに値するものと感じられた」（GT3）。神々の美しさはこの意味で理解されなくてはならない。ギリシア人は、そこで自らの生がありのままのものとして是認されているのを見た。すなわち自らの生を美しいと感じたのである。それは、ギリシア人の生を「浄化するverklärend鏡」（GT3）だったのだ。「シレノスの智慧」が逆転する。「最悪のことはやがて死ぬことであり、次悪のことはそもそもいつかは死ぬことである」（GT3）、そこでは「嘆きさえも現存在の賛歌となる」（GT3）のだ。

世界観の神

しかしその時仮象性の意識はどうなっていたのか？　無論彼らは神々が現実に存在すると考えていたわけではなく、まして自身を不死の神々と混同することもなかった。神々の仮象性はすでに意識されていたのだ。

我々はここで根本的な問題に触れることになる。なるほど、彼らの生はオリュンポスの世界の中で是認された。しかしそれはあくまで仮象世界においての話であり、しかも彼らはその仮象性を意識していたのだ。ならば、神々はどうして彼らの生を現実においても是認しえたのだろうか？

問われるべきは、ディオニュソスの到来によってギリシア人は何を自覚したかである。それはもはや神々の仮象性ではありえない。言い換えれば、当時の彼らには、別のものに対する自覚が欠けていたのだ。

> アポロン的なギリシア人は、彼（ディオニュソス的陶酔者）にどれほどの大きな驚嘆の眼を向けたことだろう！　しかもこの驚嘆は、いま目のあたりに見る一切が本当は自分にも無縁ではなく、どころか、自分のア

> ポロン的な意識が一枚のヴェールのようにディオニュソス的な世界を隠しているのではないか、という恐怖が混入してくれば、ますます大きくなるのである。（GT2／（　）は筆者）

彼らに欠けていたのは、神々が一枚のヴェールであることについての自覚である。しかし、オリュンポスの神々がヴェールとして機能するとはどういうことか？　ヴェールということで何が指示されているのか？

ここでアポロン的観照の事後効果が問題にされなくてはならない。オリュンポス時代のアポロンの記述で強調されるのは、観照時の経験ではなく、それが観照者に与えた影響である。オリュンポスの世界は、観照という枠を超え、ギリシア人の倫理にまで影響を与えた。「倫理的な神格として、アポロンは信者たちに節度を要求し、それを守りうるために自己認識を要求する」（GT4）。彼らはオリュンポスの世界から、個体存在として節度を守ることを倫理的要求として読み取った。「美という審美的要求」と「節度という倫理的要求」（DW2）が並行する。さらに、「自分の限界を守るためには、それを知っていなくてはならない」（DW2）。「汝みずからを知れ」は「アポロン的な警告」（DW2）である。

> しかしアポロン的なギリシア人がもっぱら自らを見ることのできた鏡、すなわち知ることのできた鏡は、オリュンポスの神々の世界であった。ここでギリシア人は、夢の美しい仮象におおわれた姿で、自分のきわめて独自な本質を再認識したのである。（DW2）

夢の記述にある一節を再び引用しよう。夢見る者は、「夢に現われる姿から生の解釈を行い、夢に現われる事象によって生に対処する訓練をする」（GT1）。あるいは別の箇所ではこう言われる。「アポロン的なものは生の形象に我々のそばを通らせて、それらに含まれている生の核心を思想的に把握するようにと我々を刺激する」（GT21）。ギリシア人もまたオリュンポスの

神々を介して自身の生を解釈した。すなわち、そこで描かれているように、自身の生を「それ自体として追い求めるに値するもの」（GT3）と解釈したのだ。神々はギリシア人の生の解釈を変えた。自らの生を、あるいは世界をどのように捉えるのか？　それは一般に世界観と呼ばれうるものであろう。つまり、オリュンポスの神々はギリシア人の世界観を変えたのだ。

> 世界の修正――これが宗教、あるいは芸術だ。生きるに値するためには世界はどう現れねばならないか？（5［32］）

ここで我々は『悲劇』本来の主題である生の是認に触れる。問題は世界観なのだ。「生きるに値する」世界観を作り出すことをニーチェは芸術の本質と見なしていた。「一般に生を可能にし、生きるに値するものにする諸芸術」（GT1）。芸術の神、生の是認の神アポロンは、世界観の神なのである。

アポロン的美によるディオニュソス的苦悩の隠蔽を今詳しく語ろう。初めに、「眼はこの（ディオニュソス的）世界からそらされて、その傍らに立っているオリュンポスの世界という輝かしい夢の所産に引きつけられなくてはならない」（DW2／（　）は筆者）。この観照を通して新たな世界観が形成される。「シレノスの智慧」が隠蔽されるのはまさにこの段階においてである。確かに、夢の経験においては、観照の快が強調された。観照の快が生存の恐怖に打ち勝つのだ、と。しかし、生きるとは観照することではない。ニーチェにとってオリュンポス時代のギリシア人は――悲劇時代におけるのと同様に――ひたすら観照に沈潜した民族ではない。それはむしろ生を謳歌した民族であった。観照をも超えてさらに生きるためには、そのための世界観が必要なのだ。従って、オリュンポスの神々がヴェールとして機能したとは、それが「シレノスの智慧」を克服する世界観を作り出したという意味で解釈されなくてはならない。ヴェールとはすなわち、世界観である。その時オリュンポスの神々の仮象性は、世界観の形成を何ら妨げるものではない。というよりもむしろ、仮象性の意識はその前提である。というのも、神々は仮

象であるからこそ美しいのだから。夢の経験で示されたように、仮象であることが意識されるからこそギリシア人はその観照に夢中になることができたのだ。仮象観照のあの強烈な快感がそこで示される世界観にある種の実在性を付与する。その限り、その世界観は思想としてではなく、芸術として提示されなければならない。別の文脈では次のように言われる。「個人が意識的に生への意欲を抱くようにな」るのは、「悲劇的思想に拠ってもちろん直接にではなく、芸術をつうじて」（3[33]）である。従って、我々はこう言わねばならない。すなわち、生の是認の神アポロンは、観照の神ではなく、世界観の神である、と。

それでは、ディオニュソスは何を暴露したのか？　ディオニュソス的陶酔において、「あらゆる限界と節度を具えた個別者は、ディオニュソス的な状態の忘我に没入し去り、アポロン的な諸規定を忘れ去った」（GT4）。「従来は限界・程度・規定とみなされていた一切のものが、ここでは芸術的仮象たる本性をあらわにし、「超節度」が真実として出現した」（DW2）。ディオニュソス的快感を我が身に経験することで、ギリシア人はかの世界観をもはや維持できなくなったのである。すなわち、彼らはその世界観の仮象性を自覚した。しかし、ここではもはや仮象性という言葉は当たらないだろう。むしろ、その世界観が幻想であり錯覚であるということが自覚されたのである。[5)] 当時のギリシア人に欠けていたのは、この自覚だったのだ。

結語に代えて　幻想あるいは錯覚の神

ところで、オリュンポスの世界観に限らず『悲劇』に登場するあらゆる世界観――そこには「悲劇的世界観」も含まれる――が幻想であるとされるのは、アポロンに対するディオニュソスの根源性に起因する。ニーチェからすれば、ディオニュソス的苦悩こそが真理であり、それを隠蔽するアポロン的世界観はあくまで幻想である。アポロンはこの幻想こそが世界の有り様であると錯覚させる。しかしニーチェは、そうした幻想あるいは錯覚こそ生を可

能にするとして、そこにアポロンの神髄を見ていたのだ。

こうして本稿は、世界観の神であり、同時に幻想あるいは錯覚の神としてのアポロンを取り出した。それでは、アポロンについてのこの認識はその後の『悲劇』の議論に如何なる展望を開くのか？

> ここに永遠の現象がある。――貪欲な意志は常に、諸事物の上に拡がる幻想によって、被造物を生の中に確保し、生き続けるように強制するための、何らかの手段を見つけ出す。ある人はソクラテス的な認識の快感と、この認識が生存の永遠の傷を癒してくれるという妄想とに束縛される。他の人は眼前にはためく芸術の美の誘惑的なヴェールに巻き込まれるし、また別の人は、諸現象の紛糾の下でも永遠の生は不滅に流れ続けるという形而上学的慰藉に捉えられる。（GT18）

「ソクラテス的世界観」（GT19）、オリュンポスの世界観、そして「悲劇的世界観」、これら三つの世界観はここで「幻想の三段階」（GT18）と言われる。だとすると、これら全てにアポロンが関与しているはずである。今や『悲劇』におけるアポロンの活動領域は無際限と言いうるまでに拡張される。『悲劇』には、「アポロン対ディオニュソス」、「ソクラテス対ディオニュソス」に並んで、「アポロン対ソクラテス」という第三の対立が存在することがつとに指摘されてきた。[6] 多くの研究者がその対立軸を仮象の仮象性の意識に見ている。つまり、「ソクラテス主義」は自らの世界観を「無制約的なものと妄想する」（GT18）が、一方アポロンには常に仮象性の意識があるのだ、と。しかし、殊世界観に関しては、アポロンは幻想・錯覚の神であり、その限り「ソクラテス主義」との対立は必ずしも明白ではない。両者の対立を仮象性の意識の違いに求めるにしても、慎重を期さなくてはならないだろう。一方、オリュンポスの世界観と「悲劇的世界観」との対立についてはどうか？　アポロンとディオニュソスの協調から成立する後者の世界観では、前者におけるようにディオニュソスが完全に隠蔽されることはないと

は少なくとも言えそうである。しかし、ニーチェは「悲劇的世界観」がこの世界の真実を表しているとは考えていない。それはあくまで「真実らしさ」（DW3）の世界である。この点を理解するためにも、幻想・錯覚の神としてのアポロンが一つの鍵となるだろう。しかし、この点については別の機会に譲らざるをえない。

［注］

1）　ニーチェのテクストは次のものを使用。KSA: *Sämtliche Werke: Kritische Studienausgabe*. Hrsg. von G. Colli und M. Montinari, München, Berlin/New York, 1980.『悲劇の誕生』及び『ディオニュソス的世界観』からの引用は、それぞれ略号 GT, DW の後に節番号を、『悲劇的思想の誕生』の場合は、略号 GG の後に KSA 第一巻の頁数を付記。遺稿からの引用は KSA 第七巻から。ノート番号、断片番号により示す。翻訳は白水社版を参考し適宜訳を変更した。原文の強調は省略。引用中の強調等は筆者による。それ以外の参考文献は末尾の一覧を参照されたい。
2）　須藤（1985）、42-45 頁参照。
3）　竹内（2011）、20 頁参照。竹内氏は仮象性の意識の意義をとりわけ安全性に結び付けて解釈しているが、その点については肯んじえない。
4）　『キリスト変容 Transfigration』（ラファエロ）をニーチェはアポロン的絵画の例として挙げるが、Verklärung はこれに対応するドイツ語。
5）　竹内（2009）、19 頁及び五郎丸（2004）、185 頁参照。竹内氏が仮象の仮象性をパースペクティヴの相対性と結びつけ、当時のギリシア人にはその意識はなかったとする一方で、五郎丸氏は、彼らは自身を神々と混同することはなく、その点で仮象性の意識を有していたとする。仮象の仮象性と世界観の幻想性を区別する本稿の解釈は、一見矛盾する両者の解釈を調停する。つまり、仮象としての神々の仮象性は意識されていた（五郎丸氏）が、世界観の幻想性は意識されていなかった（竹内氏）、と。
6　菊池（1997）、59 頁参照。

［参考文献］

Daniel Came (2004) “Nietzsche’s Attempt at a Self-Criticism: Art and Morality in *the Birth of Tragedy*”, in: *Nietzsche-Studien*, Bd.33, pp.37-67

Enrico Müller (2002) „‚Aesthetische Lust‘ und ‚dionysische Weisheit‘. Nietzsches Deutung der griechischen Tragödie“, in: *Nietzsche-Studien*, Bd.31, S.134-153

Friedhelm Decher (1985) „Nietzsches Metaphysik in der „Geburt der Tragödie“ im Verhaältnis zur Philosophie Schopenhauers“, in: *Nietzsche-Studien*, Bd.14, S.110-125

Koenraad Hemelsoet, Benjamin Biebuyck, und Danny Praet (2006) „‚Jene durchaus verschleiterte apollinische Mysterienordnung‘. Zur Funktion und Bedetung der antiken Mysterien in Nietsches frühen Schriften“, in: *Nietzsche-Studien*, Bd.35, S.1-28

Richard Schacht (2011) „Das Leben lebenswert machen: Nietzsche über die Kunst in *Die Geburt der Tragödie*“ in: *Die Philosophie der Tragödie Schopenhauer-Schelling-Nietzsche*, Lore Hühn und Philipp Schwab (hrsg.), de Gruyter, Berlin/Boston, S.497-530

菊池健至、「悲劇的な生と知――ニーチェ『悲劇の誕生』におけるアポロン的な仮象感覚の意義をめぐって」、京都大学哲学論叢刊行会編『哲学論叢』第 24 号、1997 年、51-63 頁。

五郎丸仁美、『遊戯の誕生　カント、シラー美学から初期ニーチェへ』、国際基督教大学比較文化研究会、2004 年

須藤訓任、「ニーチェのプラトン――アポロンのヴェールのかげに」、大谷大学哲学会編『哲学論集』第 32 号、1985 年、42-61 頁。

竹内綱史、「アポロンとソクラテス――『悲劇の誕生』の歴史哲学再考」、大阪大学大学院文学研究科哲学講座編『メタフュシカ』第 40 号、2009 年、13-26 頁。

――「『悲劇の誕生』の形而上学再考」、龍谷哲学会編『龍谷哲学論集』第 25 号、2011 年、1-32 頁。

（大学院博士後期課程学生）

Resümee

Über Apollo in Nietzsches *Geburt der Tragödie*

Kota Taniyama

Was für ein Gott ist Apollo? Der Zweck dieser Abhandlung ist, aus § 1-4 in der *Geburt der Tragödie* eine Antwort auf diese Frage zu bekommen.

Das Bewußtsein des Scheins als Schein spielt dabei eine wichtige Rolle. Wenn wir träumen, ist uns der Traum manchmal als Traum bewußt. Besonders bei Alpträumen betont Nietzsche dieses Bewußtsein. Denn es ermöglicht uns, den Traum weiter anschauen zu wollen. Das bedeutet aber niemals, dass dieses Bewußtsein die Angst des Alptraumes erleichtert. Es ist nicht ein Bedürfnis nach Sicherheit, sonden eine Lust an der Anschauung des Traumes als Traum, die uns ihn weiter anschauen lassen macht. Wir haben die Lust, uns in der Anschauung des Scheins als Schein zu vertiefen.

Zudem spricht Nietzsche über den Schein der Schönheit der Olympier. Die Griechen verhüllten durch die Schönheit der Götter das Leid der Nichtigkeit des Lebens(„Weisheit des Silen"). Die Olympier stellen ihr eigenes Leben als schön dar, und die Griechen schauen in den Olympiern ihre eigenen verklärten Gestalten an. Dabei ist ihnen bewußt, dass die Olympier lediglich Schein sind. Durch die Anschauung des Scheins bilden sie eine Weltanschauung, nach der ihr Leben als lebenswert erscheint. Apollo als ein Gott, der eine Weltanschauung schafft, ermöglichtet ihnen zu leben.

Allerdings enthüllte Dionysos diese Weltanschauung als eine Illusion oder Täuschung. Apollo als Gott der Weltanschauung ist zugleich auch der Gott der Illusion und Täuschung. Um überhaupt zu leben, braucht man Illusion und Täuschung. Nietzsche hält es für den Inbegriff des Apollo, solche Illusion und Täuschung zu schaffen.

Stichwörter: Apollo, Schein, Weltanschauung, Illusion, Täuschung